太刀
刀
毛沓
敷皮
采配
團
團麾
緄

本照四

太刀之図

カフトカ子長サトカリニテ一寸八分

周八、一寸三分

紋二十三

鞭結

足ノ紋如此

足ノ八、一寸一分
長サ二寸、

ミ平先如此

セメ如此

セメノ有所ガ、
ワ先ヨリ一寸
五七分

足間五寸

前同
八、同前長

上ノセメ紋数八ツ

モヽヨセ六寸八分

サ二寸三分

芝引長サ八寸三分
紋九ツ但紋先石
突ノ方ヘム[illegible]リ乙

二ノセメト云紋数八ツ
紋ノムキヤウ何モ同

石突ノ長サトカリマテ
一寸六分紋数亡二何ニテモ
家紋ヲ付ル也

鍔ノ本

右一巻者南家鴻末之雖
為秘書懇以家流儒學之輩
常令授与之平用而之行稀
能見地之有可見殘者也

毛詩秘事

十一

毛沓秘術

一 毛沓ト云ハ胎金両部之字一躰之形成カ故ニ佛陀ニテハ皐高ト云 神道ニテハ沓ト云 武士ニテハ毛沓ト云テ軍術トスル

天竺ニテハ獅子之皮大唐ニテハ羊之皮
日本ニテハ熊之皮ニテ作也

一毛沓之内ヲ錦ニテ張ヘシ同毛之皮ニテ
大緒ヲ立ヘシ左之毛沓之皃ニ五之皺
有ヘシ合テ二因縁ヲ表スル之

一毛沓之内ヲ祭亥辰之時辰之方之
水ヲ取硯水ニ入此術ヲ可書

右之乇沓之内書之

一毛沓之誦文曰
愛染之弓箭ニ向怨敵ハ的ト成テソ射放
サレケル此咒ヲ満ハ毛沓ヲ不踏共毎日
一返ツヽ修スレハ其日之怨敵悉ク滅亡無
疑者也毛沓ハ其時ニ當テ可着也
一負軍ニ討死セント思テ是毛沓ヲ着右咒
満テ敵ニ向フナラハ七日之内ニ可滅處無
疑者ニ

一　其城ヲ取除時此毛沓ヲ左計著メ右之
毛沓ヲ城ニ残置ナラハ一世敵其城ヲ持
事不可有是ヲワルト云

一　敵之中ヘ懸入時心モヲリヒス敵味方ヲ見テ
モ見違ヘサル事四方四寸之紙ニ此符形
ヲ書

　　　　　　馬騎陰如律令

是ヲ書テ毛沓向テ咒満苻ニ記鐙之
柚苻ヨ

一寢屋之枕之祕支一世人ニ不聢祕術ニ
馬フン紙ヲ七寸四方ニ切テ此苻ヲ可書

𤘽鬼歎唸々如律令

此苻月研ニテ可書左之毛沓之内ニ
置ヘシ一世人ニ不聢万災難ヲ遁ル、

一城ニ籠事難叶時必一戦ノ可勝支度毛

沓ヲ着シ鬼門之方ヘ七足歩テ旗之鳩居ニ
件之水研水ニテ此符ヲ可書

𠘨囲鬼喼如律令　卍

如此書テ旗ヲ辰之方ヘ向テ大将軍毛沓ヲ
着ナカラ一合戦セヨ必可勝敵敗軍無疑者也

一　軍之門出ニ大成凶事有時吉方ト成テノ
出陣スル事

囲圓畾鬼吅喼々如律令

此符書テ紙ニ認テ鎧之袖ニ付ヨ大吉ト成ヘキ之

一具ハ悪方悪日ニ可為出陳支鬼門之方ヘ向テ毛沓ヲ向左着ノ七足歩テ鷹之羽矢一ツ鬼門ヘ可可射矢取咒之支南無梵天帝釈天地中央四天大土ト七返誦テ射ヘシ右之掌之内ニ鬼ト云字ヲ書テ馬氣納テ舌闇ヨ可為大吉ト之

一認時九字十字ナ色々口傳多キ之

右條〻秘術代々當家〻傳處明鏡也
千金莫傳可秘々々

小笠原大膳大夫
長特

同
右近大夫
貞慶

小池甚之丞
貞成

佐木三右衛門尉
正成

右此一巻於当家別伝之秘事候
雖為数年往古執心懇望進之候 令免之
起請文以可有他見者之

數度之寄

十七

敷波

一 長さ二尺弐寸 横弐尺五寸

一 裏ハ布とも絹ともすさつ後先ハ表乃如くに

よき程へし 又紋萌黄浅黄萌黄等へし

一 皮ハ麻之草 麦色とかきと御絵あり

乃ちこく白毛と緑さるへし

一黒革ぬりの縁をさすへし色ハとにかく
又ハ見ぐるしからぬ腰帯も
縁と同し革なるへし
一的場にて數付ハ的の前へ白毛と
羽をさすへし
尤又ハ公方の後へ可参
一軍陣ぬりさやまきの上ニ蒔付も
くゝりを後へまはすへし
一矢ハ名誉の鏃數へし 乗ハ
白かゝ紙打掛へし ころ小太刀

右乃方之他ヘ付候者共也

小笠原大膳大夫 長時

同 右近大夫 貞慶

小池甚之丞 貞成

右此一巻別而深秘雖任懇
執心難黙記進之如斯
畢不可有他見者也

再作之巻
八

算済之巻

支那幣帛ハ説之文字説も説第脚髀書

呉服ともいハ麗としての和服の宋幣ハ神楷の

幣也宋ハいろとろと刻も幣に宝の本

有之今世金銀の紙也良ハ能き幣銭

周分ハ略之白半幣ニハ串ト足塗也
赤半幣ニハ本廻ト見ヘル先進退合
合戦姿ク迷ヨすみ是大要也

一 串ノ木ハ桐檜竹木也 渋草ヲとらせてぬ
塗ハしハ其々ニ好ミ次第なり
一 串ノ長サ一丈余 横ハ一寸八分 内ハ二寸八分余
平目ヨ作ル 挟ノ穴串ノ木より七寸
又一寸五分通して明 鯨目ヨ寸ノ串ノ上下

一寸八分穴へ合せ候眼ニ義あける

一 又云串の長さ二尺八寸余ニ三寸八分

白り 又云作陽ニ有法ハ串ハ三尺六寸ニ而

串ハ二尺八寸串とハ角をとする也さ二寸

八分白り 鹿妻の穴串のまハり二寸並

高明庵とこそあり

一 緒ハ萌黄革藤色革黒革の類又ハ

赤粧之色ハ好よろしく 紫ハ斟酌也

長三尺八寸六分柄より一寸或ハ二寸短く
猪尾し一寸短キハ二寸或ハ長キハ
鑓の環ありの端ニ付て藤まきあ
まり又腰ニ棟革なとあり
一鑓の長六寸之
一再年八廿五人の組頭より持なり
一女死ニて飛脚を流し事一圓不同し

右一巻者當家傳来之法

為秘書雖以淺修學所之
勞令校合之年用意之所粮
後見他云有之可補者也

圖之巻

九

椰圖ハ矢武を避急難の方を清富ハ徳あり
而を凌暑を拂ふ事如此ハ幾より放ふ行
板紙縲を作るハ女意をもつて安倍の
貞任を先祖攻られ時も両陣て旗營
又ハ圖中て軍條をしれおりしより軍営
乃用中して軍利の助ともり奴状を渦く

絲持武拔目草にして絹地をよく塗表
裏小金線を数く書く縫ひもよし柄の目
又ハ卍字菱を透すにしても柄ハ樫單木
又ハ弓丸折を用ひ絵をもして澁草にて
總合て黒塗ニ塗て長ハ壱尺壱寸或分柄の
頭の上ハ二分飾ある雁足ハ三ヶ所人作
而持乃図也平人ハ長八分或ハ又云柄の
長壱尺八分中ハ樫木に三ケ所包む

幅六分厚さ四分図付の余ハ柄と別図

幅六分厚さ四分図ハ付ろ方ハ柄と刃と図
と入口刃を振して上ハ文六寸四寸六分縮
天の印之柄先より寸迄之穴とゆ腕貫
の緒を付る之緒の長さ八組編みて壱尺
続く之文云図の上ハ朱して六面十二
星并日夜の為潮汐の干満の附刻ある
家への秘術なり文軍記ニ六寸ほか八
壱尺八分ニて其根ハ六識六根の事なり

圍ハ将軍より精ハ文武兩道に依ら清光

ゆうへ持へし

一 圍を持て貴人へ渡す時ハ両手にて

其の方を我左へ柄を並へて右将左

乃皇を掛けて御用意左へ之趣之

一 筆有時ハ下へ合時ハ頭を左へ渡す

一 禮 し て し

一 軍兵へと相対時ハ左より右へ向ひ持也

又先へしまつるを

一 進む軍兵をハ押止ニハ図と左の
手ニ鞭をし右を左へ寄せてしまき
前へしもつるさ

一 敵を招く時ハ右の手にて赤扇に招し
調伏の義也是を凶図と云

一 圏を招く時ハ左の手に図と取返し
招く是を耳豪図又ハ豪図

やも之

一 鞦の人数と指ハ圍の先ニてさ圜の人数と指ハば西東ニて掃ゑますし

一 鞦ニ掛る付ハ馬首ヨと圍ニて左より右へ二ツ寺振くこ為目ニ右の後と談て軌鞦を流す之

参柳心尾箕
畢翼斗女壁

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥
正
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
勝同同屓同

龍

天諸童子 以爲給使
刀杖不如 毒不能害

小笠原左近將監源統最

ここの名字官姓名をかき入也

図表ハ泥金ニて書之要恩

十三

團麾之圖

くその寸五寸五分
し

一紙を寄ふうち付（

一團の長サ七寸なり他團のさい機り

一 柄の長サ七寸なり 継柄のつきハ様々
次第之
一 上色の事 金銀なり

さいのゑし図也

かり

し

在
列
陣
皆
前
者
闘
兵
臨

臨兵闘者皆陣列在前（リンヒヤウトウシヤカイチンレツサイセン）

一 まふのこゝん字

もう

唵摩利支曳娑婆訶（ヲンマリシエイリワカ）

右のうちにれうし書也

し

ト
口傳

天上天下唯我獨尊行謨輪

天上天下唯我獨尊行譲輪

口傳

一 毎にふうちゝのよきなかとゝく

ほうしもきうふす法有文なり

まかしはし用なさいなるかなし

右一巻已當家傳来之雖
為秘書懇志不浅依望之旨
令授与之畢貴所之外猥他見
他言有之間敷者也

緄秘密之巻

凡七

縄七手懸拂秘密巻

第二

持佛堂ニテハ両ノ芝之方ヲ拂テ右芝之方ノ端ヲ同方ノ腰ニ挟ヘシ叔持佛堂ニテ禮メ出取左ノ芝之方ヲ又同方ノ腰ニ挟出ヘシ持佛堂ノ外ヘ出テ又如本ニ懸ヘシ

第二

所ノ鎮守ノ前ニテ右ノ中禄ヲ拂テ同方ノ腰ニ挾ヘシサテ法施ナント致シテ下向スルトキニ又如本カケテ可書

右ノ手ニテ懸モスヘシ

第三

親ノ前ヘ出テ暇乞ノ取両ノ中録ヲ拂

テ左ノ中禄ヲハ同方ノ袖ノ上峯テワタガミニ挾ヘシ右ノ中禄ヲハ其侭放テ親ニ向テ暇乞ヘシ罷出時ハ先左ヲカケテ次ニ右ヲカケテ出ヘシ若酒アラハ拂タルテヽ盃ヲ取テ呑ミ下ニ置取左ノ中禄ヲ取右ノ肩ヨリ背ヘ越テ綿ガミニ挾テ酒ヲ呑ヘシ其後罷出取先左ヲカケ次ニ右ヲ懸ヘシ

第四

主君ノ御前ヘ出ントセンニ取両ノ中禄ヲ拂テ其侭敬テ對面シ奉レテ出取右ヲカケ次ニ左ヲカケ可出若酒アラハ親ノ肴ニテノ如ツ中禄ヲ後ヨリ越テ右ノ綿カミニサシテ酒ヲ可呑其後罷出時先右ヲカケテ次ニ左ヲ懸テ出ヘシ

第五

敵味方共立ニテ凱ノ聲ヲ作笠前ヲ

敵味方共立ニテ凱ノ声ヲ作箭ヲ
射合セントスル時心ヲ正妥ニ東ヘ向テ
日輪ヲ禮拝スルト觀念シテ勝名ノ
緒ヲ両ノ手ニ両緒ヲ取テ九字ノ文
三返唱ル度ニ此緒ノ端ヲ以テ日輪ヲ
招ク由ヲスヘシ緒ヲハ両ノ手ニ劔印ニシテ
取ナリ其後馳ヘントスル時亦本ノ如ク
懸テ馳ヘヘシ

第五

第六

軍終リ陳ニ皈テ祝酒ヲ先可呑
其取ハ両ノ冨ミノ緒ヲ拂テ酒ヲ可呑
其後皆可拂勝軍ノ取ハ右ヨリ〆
負軍ノ取ハ左ヨリ拂ヘシ軍ヨリ皈テ
酒ヲ不呑シテ拂ハ畧儀ナリ

第七

亡還ノ前ヘ行取ハ両ノ勝名ノ緒ヲ

七張ノ前ヘ行取ハ両ノ勝名ノ緒ヲ

拂ヘシ右ノ裏越テ押付ニ可極左ノ
緒ヲトリ胸扱ニハサンテ礼シテ下向
ノ時ニ至テ右ノ手ニテ左ノ緒ヲ取
テ如本掛テ可出ナリ

右以上七ヶ掛拂者甚秘之
口傳也唯授一人千金莫傳
是ヲ灌頂巻ト云當家之秘術也

清和天皇後胤自
源義家公當家代々
小笠原長時
仝　貞慶
此巻者當家之面々一刑持之人

此巻者當家之面々所持之人

ナク候故其心得ヲ以テ他人ニ
御免有間敷候依懇望深
切書写進之也